

それと共に、ルイセンコ学説を全く理解しようとしないうし、する能力もないことを示している。

こんなに極端でない人は、「ルイセンコ学説はデータが不足である」という一言によって無視して検討しようとしないのである。われわれ物理学者にとってはデータが出そろって、確実になったら、その問題はもはや過去の問題でわれわれには興味はないのである。われわれが湯川理論を追求したのは、データが全くなく、海のものか山のものかわからなかったからである。

さすがに物理学者は生物学者ほど政治的偏見にみちてはいなかった。戦時中、ソ連の学者は宇宙線の中に多くの種類の間子があるという実験結果を発表した。「自由世界」の学者達は、これを検討し、その実験は相当にあやしいところがあることを指摘したが、その問題を無視したり排斥したりせずに、積極的にとり上げたのである。こうして英米において多種類の新粒子が発見され、英国のパウエルはノーベル賞をもらった。

2つの世界の科学を見るわれわれの態度はこのように偏見を排して如何なる新しい考え方に対しても参考にし、一考する公正さをもたねばならない。政治的偏見こそ損失を招くものである。

## 7 科学とヒューマニズム\*

### 戦争と科学

科学の成果は社会と多かれ少かれ直接の関連をもっている。社会は科学なしに進むことはできない。しかし科学の成果がその時々権力者に都合がよいとはかぎらない。逆にまた権力者は科学を悪用することもできる。科学者は自己の科学的興味とか人道主義的関心

\* 「科学画報」1956年（昭和31年）12月号。

などによって科学を進めても、その成果は思わぬ方に悪用されて使われることの方が、古来多かったのである。その主なものは軍事技術であろう。

戦争によって科学が進むということがいわれる。実際そのような面があったことはたしかだ。しかし科学の発達には本質的に戦争が不可欠なのであろうか。むしろ従来の社会は戦争にたいしては異常に熱心であって戦争のためでもなければ科学をまじめに進めようとしなかったともいえるのである。これは科学そのものに必然的な性格ではなく、従来の社会がどこか不健全な要因をもっていたことを示すので、将来健全な社会がつくられたならば、人類の幸福のためにそれ以上の努力をもって科学が追求されるようになるにちがいない。

従来の社会では科学者は多かれ少かれ戦争の片棒をかつがされた。特にその極端な悲劇的な例は原水爆であろう。原水爆のもとになる知識の発見者達アインシュタイン、マリー・キュリー、ジョリオ・キュリー夫妻、マイトナーなど何れをとっても熱心な平和主義者、理想主義者であるのに、その研究の成果がおそるべき原爆となつてあらわれた。またもっと直接的にも、戦時中米国で原爆研究にたずさわった科学者の主な人達の中には反ファシヨ的な考え方の人が多かった。原爆ができてからも、科学者達のフランク委員会は広島、長崎に原爆を投下することに反対した。それにもかかわらず政治家達はそれを投下することに決定し、投下したのである。戦後、米国において科学者達の団結によって、原爆の完成までの基本的な歴史を書いたスマイス報告が発表されたり、軍事的な性格をもったメイ・ジョンソン原子力法案を撤回させたりすることに成功したけれども、原水爆がもつようになった圧倒的に強力な政治力の前には如何ともできなくなってしまった。そして原子力の機密機構はマッカーシー旋風となつて、多くの自由を守る科学者を迫害した。こうしてさらに、フックスやローゼンバーグ夫妻はスパイとして罰せられ、

また殺されることになった。

科学は人類全体の財産でありそうであることによって健全に発達しうるものである。特定の国家、特定の団体や個人が科学を独占することの方が罪悪なのである。そのような観点からすれば、秘密の科学的知識をもらしたということをスパイとして道徳的な悪者扱いする方がまちがっているというべきであろう。

軍事的なものとして発達した原子力は、その平和利用が大きな未来を約束するものである。ところが現在は平和的利用も巨大な軍事力産業と深いつながりの上になっているので、それをめぐる問題は複雑怪奇をきわめている。その中で科学者達はほんろうされているといっても過言ではない。

### 権力者と科学

もう1つの重要で困難な問題は、科学が、権力者に都合の悪い事実を明かにした場合に関してである。昔から公衆衛生に関するところでこの問題がいたるところで見られたものである。鉍毒事件とか、工場の環境衛生の問題とか、大衆の食品衛生、また薬品の有毒作用など、政府の利益や大会社の利潤が大衆のギセイにおいて確保せられ、従ってその有毒性を公表することは困難であり、非常なギセイをかくごしなければならなかった。それだけでなく、そのような有毒性を陰蔽するために、御用学者による、いろいろな妨害や、彼らによって意識的無意識的にまちがった調査研究や意見などが発表されるのとたたかわなければならぬのである。

最近での問題に黄変米問題、放射能問題がある。国民の衛生を守るべき厚生省が、それらの有害性を陰蔽する努力ばかりやっているのは奇妙なことである。黄変米など、輸入米の輸入方式に相当に汚

\* 1954年7～8月「黄変米事件」が起きた。黄変した米が配給されたのである。国民の心配を無視して、政府は何ともないといはった。武谷三男著作集第2巻『原子力と科学者』p. 403参照。

職的な不明朗なことが行われていると最近新聞は報じているが、そのようなルートであるならば有害なものもドサクサにまぎれて入って来ることも当然であろう。もしそれが本当なら、厚生省がこの汚職のホウ助をしていることになるだろう。いずれにしても科学者が黄変米の害毒を摘発するとき厚生省からの反撃をかくごしなければならぬであろう。

### 原水爆の医学的問題

近年の大きな問題は原水爆問題である。まず広島、長崎の被爆者の障害問題についていえば、政府すじまた米国側の意見として、いわれていることは、果して個々の例が本当に原爆によるものかどうかかわからないということがいわれ、それによって責任を逃れるというやり方が行われている。原爆被害者の問題は前にも指摘したが(拙著『戦争と科学』)、アカデミックな医学的定義の問題ではなく、社会問題なのである。そのような社会問題では、その原因がその結果をたしかに生じたかということをつきとめることが問題なのでなく、その原因がその結果を生む可能性をもっていることを問題にすべきものである。

むしろ今日の医学は、まだその因果関係を明かにする能力を十分もっていないことを知るべきである。個人の犯罪の場合には、それが明かでないときは無罪であるべきであり、社会や国家が行う犯罪の場合、その可能性において有罪となすべきであって、個々の事例の科学的なつながりが不分明であることによって責任をさけることはできないのである。

よく広島、長崎で原爆の被爆者に与えた肉体的影響を調査して、その結果影響がないと結論を下すことが行われている。それらを見ると決してその影響がないことを証明したのではない。そうでなく

\* 武谷三男著『戦争と科学』理論社、1953年(昭和28年)1月。(武谷三男著作集第3巻『戦争と科学』所収)

て、その調査がその影響を検出することに失敗したというべきであることがわかる。自然科学の研究において理論上或る結果が出るべきことを実験して見ても、そう簡単にその結果がでないものである。その場合科学者は、直ちにその結果は出ないと結論すべきではないのである。慎重で、忍耐つよい努力と工夫のすえ、目的の結果に到達することが多いからである。

原水爆実験の放射能についても多くのごまかしが行われている。微量の放射線に当ることは直ちに「危険」ではない。そういうことから許容量まではいくらあびてもよいというのが厚生省の楠本環境衛生部長をはじめとしていろいろの人々の説である。このような説は、放射線の影響について、放射線の扱い方についての全くの無知をばく露している以外の何物でもない。放射線というものは、どんなに微量でもそれなりに有害なのである。どの程度の有害さまでガマンするかということが許容量ということである。従って原水爆実験の放射能のように何の利益もないものに対しては有害さを、いかに少くともガマンする理由は全くないのである。レントゲン検査とか、放射能専門家などのように、他に何か有利な目的があって、それと引きかえにやむを得ず放射線を受けるときのみ許容量ということが意味があるのである。

原子マグロをさわいだが、それで病気になった人はないだろうとか、原子マグロで危険なだけ放射能を受ける確率は少ないというが如きは全くの無知のごまかしの見解にすぎない。放射能の影響は直ちに現われないうところに、また微量の場合放射線病という直接の形であらわれないうところに困難な点があり、且つまた警戒すべき点があるのである。今日放射線は微量といえども悪い影響があることは生物物理学で証明されている。しかし微量の放射線をうけた人体がどのように障害されているかを検出することは、未だ今日の医学では成功していないのである。

直ちに影響があらわれないうからといって無視したり、被害の確率

が少いといって無視するのなら、ライ病も同様に、影響があらわれるのに多年を要し、伝染の確率も少いので無視すべきであろう。しかしこれを無視することをしないのは、その正体が医者にとって明かだからにすぎない。

今日必要なことは検出が困難だからといって無視したり陰蔽したりせずに、まず有害にきまっているものを無用に許容しないことであり、またそれと並行に真面目な研究を進め、危険な可能性のあることは勇敢に社会にうったえることである。

## 8 ABC戦争とは何か？\*

——みな殺し戦争としての現代戦——

### 中東・東欧動乱は水爆戦争の危機を深めたか

最近ソ連は、スエズ問題について、英仏がもしあくまでも侵略戦争を続けるならば、あるいはロケット弾によって原子攻撃がなされるかもしれない、というようなことをいって、相当世界の人々を驚かした。

とくに1955年夏のジュネーヴのいわゆる雪解け以来<sup>\*\*</sup>、世界は平和の方向に向って来て、人々はホッとした気持ちになっていた。ただ原水爆実験というものだけが、何か不気味なものをもたらししていた。しかし一般的にいって、もはや、戦争に解決を求めるということは時代遅れだ、ということの世界の人々が受け入れたかのようにあったが、今度のエジプトに対する英仏の侵略<sup>\*\*\*</sup>、それからソ連がハンガリーを軍事的に抑えたいという問題<sup>\*\*\*\*</sup>、この2つの問題によって、世

\* 「知性」1956年（昭和31年）12月号。

\*\* 1955年（昭和30年）7月18日、米英仏ソ首脳ジュネーヴ会議開始。

\*\*\* 1956年10月29日、スエズ戦争始まる。

\*\*\*\* 1956年10月23日、ハンガリー事件起る。